哲學研究
第四百七十一號
第四十一卷 第一册

構想力の問題

石田仁

一

精神物理的存在としての人間の本性は、それがいたるところ内と外との統一であるところにある。すなわち、自己を外的世界に表出し、外的世界を自己のうちに再現するところにある。この關係においてのみ、人間的生は自己を形成することができる。神話も形而上學も詩も言語も、ひとしくその根源的地盤をこの關係にもつている。そして、生の本性がこのように内外の統一であるところに、生がつねに聯關 Zusammenhang として捉えられねばならない深い理由があるであろう。生はその諸要素の單なる結合と異なつて、つねに自己を外に表出し擴大するとともに、内に集中しながら外なる世界を自己に再現するという、緊張關係においてあるからである。生はつねにそれ自身のうちから直接に生きる、とともに生がリアリティーをもつてあるかぎり、それは外なる世界を再現するものとして、その最後の深みにいたるまで聯關である。すなわち、生はその内面がどこまでも外につながることによつて、それ自身の形を

もつのである。生のリアリティーの體得が、それ自身すでに內外の統一であるところの體驗 Erleben によらねばならぬ所以である。しかも生の形は、生きらるべきものとして、人間によつて世界のうちに探求され獲得されねばならぬものである。それは人間精神の努力と、その成果としての習性化とによつて、はじめて我々のものとなることができる。人間的生の發展のめざすところは、自己の生きるべき本來の聯關を獲得すること、ディルタイのいわゆる「收得聯關」erworbener Zusammenhang を形成し、實現するところにある、ということができるであろう。それは世界の中に自己を發見し確立することにほかならない。しかも自己の發見と確立が、自己のリアリティーのそれであるかぎり、それは單に生の內なる過程に終るものでなく、外なる世界それ自身の形成という意味をもたなければならない。

このような生の形成は、それが根源的であるにしたがつて、合理的形式を破る衝動的性格をもち、概念的體系に盛りきられえない非合理性をもつ。その形成はむしろ、外的事物のうちにたましいを感じ、自己を形像的に表現する、藝術家の制作に比べられるところをもつであろう。「生を生そのものから理解しよう」とする生の哲學において、概念的把捉にまして體驗 Erleben や理解 Verstehen の過程が重んじられ、その論述がおのずから詩的表現に近づこうとする所以である。したがつて、古來主として藝術制作にはたらく心意の能力とされた構想力 Einbildungskraft は、生の哲學においては、合理主義哲學におけるとは異なつた重要さをもつものとなる。構想力はここでは合理主義哲學におけるように理性に從屬的な能力ではなくして、理性にまして根源的な位置を與えられるのである。構想力が古くから「誤謬の主」とされ、あるいは「人間心性の不可解な力」とされたことも、かえつてそれが生のリアリティーに深くつながる能力であることを證しするもの、ということもできるであろう。

構想力が哲學思想の形成にはたす機能を、ディルタイの思想を手がかりにしてたずねようとするのが小論の意圖である。

構想力は、ディルタイにおいて、一般的には「體驗の本性に根ざす二重の仕方」[1]においてはたらくところの、内を外にし外を内にする能力、とされている。すなわち、「主觀的狀態が外的過程の象徴のうちに感性化され、外的事態が内面化される」[2]ところの能力、そして現實のうちにありながら現實を超越する形像を形成する能力、とされている。それは、自己を外にしながら内であろうとする生の根源的な形成力、ということができるであろう。このような構想力は、何よりも形像的表現の能力として、ディルタイにおいても、主として文藝作品の創作の能力として、したがつてまたそれの享受の能力としてとりあげられている。「ゲーテと詩的想像」Goethe und die dichterische Phantasie, 1877. 「詩人の構想力と狂氣」Dichterische Einbildungskraft und Wahnsinn, 1886. 「詩人の構想力」Die Einbildungskraft des Dichters. Bausteine für eine Poetik, 1887. 等の表題がしめすように、構想力は、詩人の創作に固有な能力として記述され分析されている。[3]それは、アリストテレスの「詩學」以來、十八世紀に入るまで藝術論において支配的であつたところの、詩的作品を主としてその形態と技術の面からとりあげる見方に對して、藝術家の創造能力に美の源泉をみようとするドイツ美學の傳統をうけつぎながら、より經驗的な立場から、詩人の構想過程の心理學的究明によつて、文藝を體驗の表現とし、それを生の形成過程に位置づけるとともに、人間の歷史的本性を明かにすることによつて、詩的創作を歷史的世界の形成過程として明かにしようとするものであつた。しかも、歷史を生の本性の展開とみるディルタイにおいては、文藝の成立における歷史的性格をしめすことは、文藝が生からしてnaturwüchsigにうまれ、その發展とともにそれ自身に中心をもつところの、自律的文化體系として成立する所以を明かにることであつた。「詩人の構想力」においては、主として詩人の創作における心理的過程の敍述に重點がおかれているのであるが、この立場は、ディルタイの晩年の最も円熟した歷史的世界觀をしめす「精神諸科學における歷史的世界の構成」（一九一〇）において、他の精神諸科學とともに「歷史的理性批判」の體系にくみ入れられ、それによつて

詩學はひろい歴史的世界に位置づけられることとなるのである。ここでは、文藝は他の文化體系と同じく生の表現として、「客觀的精神」の世界において獨自のはたらきをする精神的作用聯關として明かにされる。この精神的聯關によつて、詩作過程は歴史的世界の形成過程としての性格をあらわにするとともに、詩的生はまた心理學的內省をこえた主體的深みからとらえられることとなるのである。(4)

要するに、詩學の中心的課題を創作過程の究明にみることは、文藝にいきる生の主體的形成の問題をとりあげることである、と同時に、歴史的世界の詩的形成の問題をとりあげることである。それは、古典的作品をゆるがぬ規準として、そこに美の原理をたずねることをこえて、文藝そのものの形而上學的始源を問うことである、ということができるであろう。(5)それがやがて詩人の構想力の問題となるのである。

構想過程をかえりみることは、單に「詩學の礎石」たることをこえて、生の形成の問題に、そして、ディルタイにおいて必ずしも明瞭とはいいがたい歴史的・表現的世界の構造の問題にせまる重要な道であるように思われる。なぜならば、ディルタイにおいて、とりわけて構想力の產物である文藝は、すぐれて「生の理解の機關」であるとされ、また總じて歴史的對象の理解は、我々がその聯關を追體驗 Nacherleben すること、すなわち追形成 Nachbilden することとして、豊かな構想力のはたらきをまたねばならない、とされるからである。(6)

(1) W. Dilthey, Die Einbildungskraft des Dichters. Bausteine für eine Poetik, 1887. Gesammelte Schriften VI, S. 211.
(2) ibid. S. 211.
(3) ミッシュ G. Misch によれば、ディルタイは「詩人の構想力」の發表以後、「詩學」に關する諸論文を改稿し、それらをひとつにまとめあげる意圖をもち、そのために多くの手記をのこしているとのことである。そのうち、著作集第六卷の終りに編者の註として收錄されているものは、ディルタイの思想の發展過程を知るためにきわめて興味深い。ここではあらかじめ、詩學に關して注目される二つの點にふれておきたい。一つは、「詩人の構想力」において用いられている感情の圈域 Gefühlskreis という概念が、手記においては、體驗の圈域 Erlebniskreis という概念におきかえられていることである。そのことは、

構想力の主體となるものがどこまでも心的生の全體的聯關であることを强調するもの、と考えられる。第二はこれと關聯して、心的過程がそれの表現する意味の見地から見直されようとしていることである。たとえば、作品の素材となる體驗內容が變形される仕方について、「詩人の構想力」において、「感情にしたがつて變形され」gefühlsmässig umgestaltet といわれた個所は、手記においては、「その意味にしたがつて變形され」nach seiner Bedeutung umgestaltet と改められている。このことは、體驗における心的側面に對してロゴス的側面を强調するもの、ということができよう。それはまた、詩學の方法として、心理學に代つて解釋學が重視されてくることである。Vgl. H. Nohl, Die ästhetische Wirklichkeit. S. 197. さらにそれは、詩學の對象が「詩人における內的過程ではなく、內的過程のうちに創造されるけれども、それからきり離されうる聯關である」G. S. VII, S. 85. すなわち「精神的聯關」であり、「意味聯關」である、という「精神諸科學における歷史的世界の構成」の主張にまでつながるものである。

(4) 拙稿「ディルタイの歷史的世界」京都大學教養部「人文」第四集參照

(5) ランドグレーベは、ハイデッガーの「藝術作品の始源」Der Ursprung des Kunstwerkes (Holzwege) への方向において、ディルタイの詩學の意義をほぼこのように理解している。Vgl. L. Landgrebe, Philosophie der Gegenwart. 5. Kapitel.

(6) Vgl. Einleitung in die Geisteswissenschaften. G. S. 1, S. 254.

II

まず、精神物理的存在としての人間的生の構造的聯關が一瞥されねばならない。生は、主體と環境との交互作用に成りたつものとして、その最後の成素にいたるまで內外を統一する聯關である。その中心をなすもの、いわば「生という時計の發条」をなすものは、「衝動と感情の束」である、とディルタイはいう。心的生は、深いパトスをいだくことによつて、自己を客觀的形像に表現するものである。したがつて、生の過程はつねに形成過程 Bildungsvorgang である。このような生の發展は、一方その諸機能がしだいに分化し獨立することであると同時に、他方まさしく分化と獨立を通して、より高い統一を實現することである。知覺や表象は思惟過程と結びついて客觀的世界像を形成しよ

うとし、多様な感情は外物および自己生存の價値の統一を模索し、さらに意志は、我々の行爲の規準となる目的や規範の體系を獲得しようとする。こうして、知覺にはじまる内化の過程と、外化の過程の尖端をなす意志過程との間に、記憶と再現の過程に媒介されて、しだいに强固な聯關が獲得され、形成される。そこに、人間性の完成をしめすところの收得聯關が形成されるのである。この聯關においては、あらゆる個々の機能は獨立的となりながら、それによつてかえつて高度の統一を成りたたせ、聯關はまた個々の機能の自主的活動のうちに、そのすぐれた規制力を發揮するのである。「心的生のこの聯關はきわめて複雜なものであるが、それはひとつの全體として、注意の視點のうちにある表象もしくは狀態にはたらきかける、……意識のうちにあるものはこの聯關に位置づけられている、またそれによつて限局され、限定され、基礎づけられる。命題はその中で確實性をもち、概念はそれによつて明確に限界づけられる、空間における、時間における、我々の狀態もそれにしたがつて方位が定められる。同様に感情はそこから我々の生の聯關に對する規準をうけとる。おおかた手段にかかずらつている我々の意志も、この聯關によつて、手段の基礎にある目的の體系を不斷に確保する」[1]とディルタイはいつている。要するに、收得聯關は自己をして自己たらしめる原理である、といわねばならない。聯關はつねに自己を展開することによつてそれ自身の中へ收斂する。そして自己とは、分化において統一し、擴大において集中する聯關以外のものではないのである。この聯關の背後に、それを擔う實體としての主體や自我を考えてはならない。[2]自己は聯關のほかにあるのでなく、聯關の崩壞することは自己が失われることにほかならない。

外なる世界を自己とし、自己を外的世界に表現する人間的生は、こうしてしだいに高度の分化と統一をもつ聯關に發展する。聯關は人の獲得すべきものであるが、それは恣意的に構成されるものでなく、生が世界の中に自己の生きる可能性をくみつくそうとする規則的展開の結果もたらされるものである。しかも、「あらゆる人間的發展は、自主的であり、生存の諸条件に適應し、それ自身において完結し、有意義であるところの、このような聯關を形成する以

上のことをなしとげえないのである。[3]」このような高度の實在として收得聯關は、ディルタイによつて、しばしば「心的生の形」Gestalt des Seelenlebens、あるいは「心の形[4]」Gestalt der Seele といわれるのである。

ところで、このような形が成立するためにはどうしても、生の時間的過程に構造をあたえそれをひとつの形として限定するところの、形成的空間ともいうべきものがなければならないであろう。ディルタイにおいてはこのような世界は、いうまでもなく歴史的世界であり、晩年の表現によれば「生の客觀態」もしくは「客觀的精神」の世界であり、總じて生の表現の世界であつた。人間は、歴史的・表現的世界の中にあつて自己を形成することによつて、歴史的世界の形成に參加するのである。もちろん、心的生の形としての收得聯關は、どこまでも生きられる形として、生に内在するところの「生の内的形」innere Form des Lebens である。しかし同時に、歴史的世界に表現され刻銘された形である。ゲーテのいわゆる「生きながら發展する刻銘された形」geprägte Form, die lebend sich entwickelt である。

收得聯關はこうして、根源的生と歴史的・表現的世界とを媒介するものといわねばならない。それは、一方歴史的世界において作られながら、他方生の根源にはたらき、明瞭に意識されることなく、つねにひとつの全體として、あらゆる心的過程を支配し、それによつて心の「平衡」Gleichgewicht、現實との「調和」Harmonie をあらしめる。收得聯關の形成と支配とが「心的生の最も高い、最も困難な仕事[5]」といわれる所以である。

ディルタイのいわゆる收得聯關については、次の點が注意されねばならないであろう。

(1) 收得聯關は個體的生を成りたたせる原理である。それはひとつの全體として内に完結性をもち、心的生をしてそれ自身において意義あらしめる。それによつてひとは自主的に生存の諸条件に對處しうるものとなる。ゲーテが「地の子等の最高の幸福」とよんだところの人格性の原理である。したがつてそれは形式的に普遍的な人間性の理念ではなく、生の重みにたえるような構造をもつところの人格性の原理である。

（2）同時にこの聯關は、歴史的世界によつて限定され、一時代に共存する諸契機の聯關を再現するものである。歴史的世界の中にあつて、この聯關は時代や社會の縮圖である。この原理によつて、個體的生は內への集中によつて現實を超出しながら、しかも現實につなぎとめられ、あたかもライプニッツのモナドのように、獨自の仕方において歴史的宇宙を表現するものとなる。この意味で收得聯關はまた生の歴史性の原理である。

（3）こうして收得聯關は、內外の媒介者として、生のリアリティーの根據となるであろう。すなわち、この聯關によつて生は眞に生きるものとなる。人間精神のいとなみが夢や幻でないならば、それは、心的生の本質ともいうべき收得聯關とのつながりを失つてはならない。收得聯關は、個々の心意能力を統御する共通的心意能力として心の平衡をあらしめ、現實を再現する能力して內外の調和をあらしめる。あらゆる心的過程は、この聯關から生じ、この聯關に位置づけられることによつて、意義づけられ、全體としてのリアリティーを成りたたせるのである。

こうして、收得聯關の形成と支配とは、生と世界の深いリアリティーをあらわにするであろう。しかし聯關が高度のものとなることは、それだけ多く崩壞の可能性をはらむことである。聯關の形成と崩壞しやすさ Korruptibilität とは、いたるところ人間的生のあり方を規定している。收得聯關のはたらきは、崩壞の可能性の中にあつて自己の姿勢を維持する精神力の偉大さをあらわすもの、ということができるであろう。

（1）Die Einbildungskraft des Dichters. G. S. VI, S. 143 f.

（2）Zusätze zum Aufbau der geschichtlichen Welt. G. S. VII, S. 334.

（3）Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie. 1894. G. S. V, S. 220.「詩人の構想力」から七年後に發表されたこの「記述的分析的心理學の理念」は、詩人の構想力に關聯してはじめて示されたディルタイ自身の心理學の思想を、獨立さして原理的に確立したものである。

（4）ibid. S. 176, 220, 275.

（5）Dichterische Einbildungskraft und Wahnsinn. G. S. VI, S. 94. Die Einbildungskraft des Dichters. G. S. VI, S.

168. Ideen. G. S. V, S. 220.

三

こうして、聯關は生であると同時に刻銘された形である。このような聯關を形成し實現することは、生が外なるものを自己として生きることであり、人間性の新たなタイプをうみだすことである。まさしくそれが構想力のはたらきにほかならない。したがつて、構想の過程は體驗のいたるところにある、といわねばならない。ディルタイも、最もひろい意味においては、藝術的想像のみならず、科學的研究において實驗のために假說をたてることも、實踐的態度において生活の理想を樹立することも、これらの假說や理想がいずれも現實の內からこれをこえて構想されたものであるかぎり、それぞれ「學的構想力」「實踐的構想力」とよぶことができるとしている。(1) しかし學的構想力においては、體驗は、現にあるものの把捉という目的によつて、また實踐的構想力においては、特殊の目的の實現という絆によつて縛られている。構想力の固有の領域は、それが現實の絆から解放されて自由に飛翔する藝術的あるいは詩的制作のうちにある。ここでは生表象とその結合は、生きることの高揚と充實をもとめる感情的・衝動的生の中心からおこなわれるのである。この生の中心から、詩人においては、知覺像は强烈にうけとられ、鮮明に記憶され、自己および他人の體驗は想像のうちにいきいきと追形成される。生の形像はたましいを與えられて感情を湛えた直觀となる。こうして詩人においては、表象とその結合は、現にあるものの限界をこえて展開するのである。詩人は最も深く生を生きる人間である。そのパトスの强さのゆえに、かれの構想は斷ちがたい現實の桎梏をふりきつて、いわば夢みる世界に入るのである。そして、創作のうちに自己と外界との扞格を克服することによつて、感情的に統一を再建しようとするのである。そして、日常的現實にはありえないけれども、それによつてかえつて現實の意味がより深く理解されるような、生と世界の本質的すがたを描き出そうとする。ここでは最も自由な創造を通して高い必然性が追求され

るのである。

こうして構想過程の研究は、詩人における、主として感情に根ざした生の形成過程をたずねることとなる。それは、最も深い中心からする生の形成過程をたずねることとなるであろう。それはいかなるものであろうか。その過程を、ディルタイの晩年の立場を顧慮しながら、「詩人の構想力」について見たい。

ディルタイが感情的體驗について、いわば「外から內へ」の方向に沿つて、基本的感情の六つの圏域、すなわち Gefühlskreis を分けていることは、よく知られている。第一は、一般感情 Gemeingefühl と感性的感情の複合からなる諸感情であり、その特色は、生理的過程が表象の媒介なしに快と苦とをよびおこすところにある。第二は、感覺內容から、それに興味が集注されることによつて生ずる諸感情である。色や音の感覺の性質や强度によつてよびおこされる種々の感情がそれである。第三は、種々の感覺內容の相互關係から生れる感情である。色や音における調和と對照、空間における均整、時間におけるリズム、等の感情がこれに屬する。第四は、思惟による表象の結合から生ずるさまざまの感情である。それは、表象の內容と無關係に、表象過程、思惟過程の單なる形式によつてよびおこされるものである。思惟の成功や明證にともなう快感情、矛盾にともなう不快感、機智や諧謔の喜び、等の感情がそれである。第五は、生を支配する實質的衝動から生れる多くの感情である。それは、感性的感情を根として、生の自己保存の衝動のようなものから、人格の維持と完成の要求、他人に對する同情、敬愛等の高尚な感情にいたるまでを包括するものであり、文藝の基本的素材となる本來の感情の領域である。第六は、意志活動の諸性質およびその價値の意識からうまれる諸感情である。意志の不屈さ、誠實さ、等のすぐれた性質は、高い生感情をよびおこし、文藝作品に高い理想を與えるものとなる、というのである。

このディルタイの Gefühlskreis の說について著しい點は、第一に「心的生における感情の遍在」[2]ということであ

る。感情は、ディルタイが後に Gefühlskreis という言葉を Erlebniskreis という言葉におきかえようとしているように、體驗のあらゆる圏域とからみあい、それに滲透しながら、その内面的意義を覺知しようとするものである。しかしこのことが可能であるためには、第二に、感情は他の體驗をこえる深さをもつものでなければならないであろう。晩年のディルタイはこれを「主體の深みへの逆方向の態度」[3]として特徴づけている。そしてこの態度によつて、「知識のとどきえない深みが感情のうちに開かれるようにみえる」[4]というのである。そうであるとすれば、感情は生そのものの意味が全面的にかつ根源的に開示される地平、という意味をもつものでなければならない。感情に特有な、この主體の深みへの方向において、諸々の感情はさまざまの曲折と變容を閲しながら、統一ある「全體的氣分」Total-stimmung に到達するのである。しかし、どこまでも聯關としてあるところの主體の深みは、また表現的世界に深くつながるところでもある。感情は統一的氣分へと深まりながら、他方において外的形像による表現に結びつくのである。このような傾向をもつ感情のうごきはどのようなものであろうか。

さて、さまざまの原因から生ずる基本的感情は融合して新たなひとつの感情となり、強さを增し、さらに聯想を介して果てしなくひろがつてゆく。ここでも形成過程の確な地盤をなすものは體驗の聯關である。すなわち、内に心意内容をもち、外に形像とその結合をもつところの體驗の統一である。この統一は、つねにひとつの全體として、内に收斂するとともに外に擴大する。基本的感情は、體驗の聯關に沿つてひとつに結合しながら、外的形像へのつながりを深くするのである。それが、詩の基本的形式であるところの象徵や比喩の始源である。

ところで、感情的體驗は衝動的、意志的過程につながつてゆく。ここではつねに、快感情を維持し、不快の感情から少くとも平衡狀態に達しようとする努力がある。我々は外的意志行爲によつて生活条件を内的要求にしたがわせ、あるいは内的意志行爲によつて自己を現實に順應させることによつて、この狀態に達しようとする。平衡とは、あたかも樂曲においてすべて不協和音が諧音にとけ入るように、緊張をはらんだ和解の原理である。しかし詩人の構想力

においては、この過程は感情の主導のもとにあることによつて、現實の桎梏をふりきつておこなわれ、ひたすら生を感情的に生きぬこうとする。すなわち、感情の影響のもとに、諸々の生表象は變貌をかさねることによつて、現にあるものの限界をのりこえ、内的要求と外的現實との乖離を止揚し、一そう純粋にして高度の滿足をもたらすような形像に到達しようとするのである。藝術の世界がここにある。藝術は、しばしばいわれるように Spiel である。しかしこのことは、感情のうごきがただ氣まぐれに推移するというのではない。ひとはたわむれに嘆きをかさねるであろうか。嘆きをかさね、喜びをかさねる感情の純一さの中には、内心の要求と外的現實との乖離にうまれるさまざまの感情の錯綜と變容とを、心の底ふかく收容し、それらを全體的氣分たらしめるところの、感情みずからの「内的法則性」がある。Spiel とは、このゆくえ知らぬ感情のうごきの純粋さをいうにほかならない。こうしてひとは生と世界の眞の意味を探し求め、それを明らめようとするのである。それは、自己の生きるべき世界のすがたを模索する構想力のはたらきであり、やがて、新たな形像の創造のうちにそれを表現しようとする詩人の創作につながるのである。「感情の内在的目的性は藝術のうちにその最高の完成を見いだす」[5]といわれる所以である。構想力の秘密は、かかつてこの感情における生表象のメタモルフォーゼの過程にある、ということができるであろう。

ディルタイはこのメタモルフォーゼの過程として、形像の理想化 Idealisierung のためにおこなわれるところの、表象要素の排去、高揚、等の過程をあげている。すなわち、感情的に體驗される意味にしたがつて、偶然的要素は縮小され、捨象され、本質的要素は擴大され、强化される、というのである。もちろんメタモルフォーゼの過程は、體驗や經驗の地盤を離れることではない、體驗や經驗に與えられたもの及びその結合の排去であり、强調である。理想化とは、現にあるものの忠實な模寫以上に深く經驗を理解するために、經驗を介して經驗をこえることであり、現實の聯關の中にありながらこの聯關に意味を與えるところの「本質的なもの」das Wesenhafte、「類型的なもの」das Typische をとらえることにほかならない。しかしこの變形過程において最も重要なことがらは、この過程の最も内

なる核心におこなわれるところの積極的「充足」Ergänzung の過程である、とディルタイはいう。すなわち、「心的生の全收得聯關がはたらくことによつてはじめて、形像はこの聯關の中から自己を變形することができる、――數えきれぬ、測りがたい、氣づかれぬほどの變化が形像の核心においておこる、そして充ち溢れる心的生の源から個々のものの充足がおこなわれる。こうして諸々の形像とその結合の中から、現實の聯關のうちにあつてこのものに意味を與えるところの本質的事態がえられる」[6]というのである。ディルタイによつて「理解がきわめて困難である」といわれるこの過程は何を意味するであろうか。

まさしくそれは、構想された形像にたましいが與えられ、形像がリアリティーを獲得することではないであろうか。自己をこえて構想された形像が、自己として生きられるものとなることではないであろうか。現實をこえた形像が、より深く現實を再現するものとなることではないであろうか。そのとき、ひとたび散亂した表象は中心から統一され、形像は無限に深い核心をもつものとなるであろう。それは、意識内容の極度の集中によつて、その結合が意識に内在的な性格をつきぬけること、心的過程から獨立した客觀的表現となることであるであろう。「詩人の構想力」においては、どこまでも内面から作品創造の過程を跡づけようとするのに對して、客觀的表現の理解から出發する晩年のディルタイは、端的に、「表現は心的聯關について、あらゆる内省が認知しうる以上のものをふくみ、それを意識の照らさぬ深みからとり出す」[7]あるいは「表現は創造的である」[8]といつている。理解の困難さは、表現のもつこの創造的性格が、心理學的内省にとらえられる意識的・内在的過程をこえた表現的世界の限定を豫想するところに由來する、と思うのである。そうであるとすれば、生表象のメタモルフォーゼの過程は、主體が表現的世界にひき入れられる過程にほかならず、形像の核心におこなわれる充足とは、形像が世界の自己表現の内容となることである、ということができるであろう。ディルタイのいわゆる「經驗を超出しながら、しかも我々がそれを通して經驗をよりよく理解するところの、人物もしくは行動のタイプ」[9]の發見も、こうして可能となるであろう。

構想力は、ここにはじめて創造的となり、內實ある作品をうむものとなるのである。ここには、いわば作品のうちに新たな自己をうむことによつて、日常の經驗をこえるリアリティーを探求する、詩人のたましいの實驗がある、といえないであろうか。そのさい構想過程にリアリティーをあらしめ、人間性の新たなタイプの發見を可能ならしめるものは、內的生と表現的世界とを媒介する收得聯關の力である。「收得聯關は、あるいは明瞭に意識されることなくして協力し、あるいは再生され、こうして形像を充足しながらこれに參加する、いずれの場合にも形像の深い背景をなす。そして、心的生のこの收得聯關が豊かで正常で深くあればあるほど、またそれが形像に關係し、いわば形像を充滿することが完全であればあるほど、藝術的形態の形成は、本當の意味での現實の再現となる」[10]とディルタイはいつている。構想過程が收得聯關に支えられ、これに規制されることによつて、外に散佚しようとする表象は內に結集され、內に流れ去ろうとする表象は外に定着せしめられる。內と外とは深く焦點をむすび合うのである。そこは、眞の意味の現實が再現されるところであり、我々のたましいが深い感動にみたされるところである。「願いは默し、魂の美がリアリティーとなるところの、平衡と調和の狀態」[11]の達成である。

(1) Die Einbildungskraft des Dichters. G. S. VI, S. 145-147.
(2) Studien Zur Grundlegung der Geisteswissenschaften. Zweite Studie. Der Strukturzusammenhang des Wissens. G. S. VII, S. 46.
(3) ibid. S. 48, 51.
(4) ibid. S. 52.
(5) ibid. S. 57, 59.
(6) Die Einbildungskraft des Dichters. G. S. VI, S. 175.
(7) Plan der Fortsetzung zum Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften. Erster Teil. Erleben, Ausdruck und Verstehen. G. S. VII, S. 206.
(8) ibid. S. 220.

(9) Die Einbildungskraft des Dichters. G. S. VI, S. 139.
(10) Die drei Epochen der modernen Ästhetik und ihre heutige Aufgabe. G. S. VI, S. 278.
(11) Zusätze zum Aufbau der geschichtlichen Welt. G. S. VII, S. 332.

四

このようにして、詩人の創作過程のうちには、生と世界の深いリアリティーを探求する、詩人のたましいの實驗ともいうべき事態を見ることができる、と思うのである。このような事態は、詩人において特にきわ立つてあらわれるけれども、精神物理的存在としての人間の本性に根ざすものとして、すべての人間のあり方にかかわることがらである、といわねばならない。ところでこのような探求の過程は、つねにそれから逸脱する、あるいはそれに破れる危險をともなつている。構想力の機能は、それら正常ならぬたましいのあり方をかえりみることによつて、一そう明かとなるであろう。ディルタイが好んで詩人の構想力と、異常な心理現象としての夢や狂氣との、類似と相違について語る理由もそこにある、と思われる。

天才と狂氣との間に著しい類似性があることは、浪漫派の人々によつてしばしば強調されたところであり、天才がパトグラフィーの好個の對象とされることは周知のところである。詩人の構想は、現實なるものの限界をこえてゆく點で、夢や狂氣と似ている。いずれの場合にも、形像は現實の桎梏から解放されながら著しいリアリティーをもつてあらわれる。天才の創造と異常狀態における空想との間には、どのような相違があるのであろうか。一方をリアリティーと自己確立への道たらしめ、他方を錯亂と自己喪失への道たらしめる原理はどこにあるであろうか。その原理が、ディルタイのいうように、まさしく形像とその結合における收得聯關の關與にあることは、もはや明かであろう。すなわち、狂想においては、生表象に對する收得聯關の規制力が低下し、表象がそれぞれ無軌道なうごきをするのに對

し、詩人の構想力においては、收得聯關のすべての力が自由な創作の方向にはたらくことによつて、表象は規制され、現實を超出しながら現實の中心につなぎとめられるのである。前者においては單なる時間性が表象を支配し、後者においては時間性に卽して空間性がこれを支配する、ということもできるであろう。[1] 詩人は、その創作において新たに自己を形成しようとするとき、つねに自己を失つて狂氣に陷る危險にのぞんでいるといわねばならない。そして、作者の生の作品への結晶が高度であればあるほど、かれの創作は背後に深淵をのぞかせるのである。すなわち、より多く崩壞の可能性をもつのである。それは自己自身によつてあるものの性格である。しかも、このような危險をはらむことなくしては、生はみずからを作品にまで形成することができないであろう。

さて詩的作品のうちに、こうして「生の本性」「事物の本性」について、その本質的すがたがあらわにされる。この意味で文藝あるいはひろく藝術は、「實在の根源的開示」[2]である、ということもできるであろう。そしてすぐれた人間の收得聯關が、よく時代の聯關によつて限定され、時代を代表するように、かれの作品は時代の息吹きを傳えるものとなる。「こうして詩的作品は時代のかがみ Spiegel der Zeit となるのである。」[3] この意味で、作品の美はまた眞でなければならない。ディルタイが「詩人はまことの人間である」[4]というのも、詩人が人生のあらゆる影響を敏感に感受し、それに思いをひそめながら、それを自己の深みにおいて統一することによつて、世界を再現するからにほかならない。このような關係が成立するためには、どうしても、自己を超出するものを自己として生きるところの生の構造が、あるいは自己の限定をこばむものにおいてよく自己を表現するところの歷史的世界の構造が、豫想されねばならないと思われる。そして構想過程は、生が表現的世界に自己を移し入れ、いわば自己を否定することによつて、自己を形成する過程である、ということができるであろう。藝術において、特に言語を表現手段とする文藝において、世界觀や人生觀が表現される、といわれる所以である。

こうして構想力の問題は、世界觀形成の問題にまでつながつてゆくのである。世界觀の形成に構想力はどのように

はたらくであろうか。この問題をたずねることは、ひろく哲學思想の形成にはたす構想力の機能を明かにすることとなるであろう。なぜなら、世界觀の問題を中心にして、文藝と宗教と哲學とは深く内面的に交渉するばかりでなく、世界觀の形成という見地から見るかぎり、人間的いとなみのすべては、心の確保たる形は普通妥當的知識によつて達成されるという心的生の本性によつて、哲學的省察に達しようとする傾向をもつからである。

（1）ベルグソンにおいて、たとえば詩の意味の理解が、語のつなぎ合せによつてでなく、對象の内部に身を移す内面的直觀によつてのみ可能である、とされるとき、このことが生の内面的理解の絶對の條件であることはいうまでもないが、單に内的直觀の中に身をおくだけでは、生が新たなリアリティーを獲得する道を明かにしがたいのではないであろうか。空間の形成的性格がベルグソンに對して主張されねばならないのではなかろうか。

（2）L. Landgrebe, Philosophie der Gegenwart. S. 128.

（3）Die Einbildungskraft des Dichters. G. S. VI, S. 230

（4）Das Wesen der Philosophie. G. S. V, S. 397. Die Typen der Weltanschauungen und ihre Ausbildung in den metaphysischen Systemen. G. S. VIII, S. 99.

五

いうまでもなく世界觀や人生觀は、生と世界の意味を全面的にかつ根源的にいいあらわそうとする人間精神の要求にうまれる。すなわち實在を對象的に把捉するにとどまらず。その價値を判定し、實踐的理想を樹立しようとする、生の根源的自己省察にうまれる。それによつて、解きがたい人生の諸問題、いわゆる「生の謎」Lebensräisel に對して、人間精神にゆるぎない據りどころを與えようとするものである。

ところでディルタイは、「世界觀形成の底層をなすものは諸々の生の氣分 Lebensstimmung であり、世界に對する態度の無數の色あいである」[1]といつている。氣分とは、すでに我々がみたように、心的生が内的要求と外的事態と

の間に生ずるさまざまの矛盾葛藤を經驗し、自己の生きるべき世界のすがたを模索するとき、世界がそのもとにあらわとなるところの照明 Beleuchtung にほかならない。厭世觀と樂天觀はその代表的なものであろう。世界觀としての哲學もまた、生きた全體として、人格の產物として、つねにひとつの「心情の體制」Gemütsverfassung、ひとつの「根源的氣分」Grundstimmung に支えられている。[2] それは、生の聯關とひとしく「生きた形態」lebendiges Gebilde である。したがつて世界觀としての哲學のもつ力は、何よりもひとがそれに生を托しうるか否かにかかつている。その運命を決定するものは、それのもつ「深さと獨創性」にある、といわねばならない。

このような世界觀の形成の手續きとして、ディルタイは、既知のものが未知のものの、解し易いものが解しがたいものの、理解の通路となる、という仕方を最も重視していつている、「生の謎の解決のこころみの高度の形態においては、まさしくひとつの仕方が特に有力である、――捉えがたく與えられたものを、より判明なものによつて理解するということが。判明なものは把捉しがたいものの理解の手段となり、說明の根據となる」[3]と。そして、世界の多樣な本質をより單純なものによつて判明ならしめようとするこのような世界解釋は、言語においてすでにはじまり、比喩となり擬人法となり、象徵となり類推となる。これらは宗教、詩、神話、形而上學に共通な手法である、というのである。しかし比喩や象徵の成立する根據は、まさしく、體驗における內部と外部との、生の形像化と形像の心化との關係にある。すなわち、自己になじみある形像に心を托すことによつて、自己を超えたものの意味を形像的に表現しようとするところにある。それは、生にせまりくる難問に對して、心をそれに投げいれ、それを心に內化することによつて、その意味を會得しようとする構想力のはたらきである、といわねばならない。

このような精神の態度は、生の根柢にふれる問題において最も著しい。そこで生そのものの意義が問われるからである。たとえばディルタイは、世界觀において對決さるべき生の謎の最大のものとして、「死」の問題をとりあげていつている。「生けるものは死について知つている、しかも死をば理解することができない」[4]と。死は生の果てると

ごろとして、ひとの意思を通さぬからである。しかし生の果てるところはまた、そこからして生の意味がはじめて定まるところでもある。[5] したがつて「死の事實の中には、この事實を解しうるものとするための想像表象に我々を否應なくかりたてるものがある。死者の信仰、祖先崇拜、死者の祀り等は、宗教的信仰と形而上學の基礎表象をうみだす」[6] というのである。これらの表象によつて、ひとは死の世界に意思を通わせ、その意味を生きようとする、いわば生を死に、死を生に全面的に einbilden することによつて、死の意味を主體の深みにおいて明らめようとするのである。

こうして、ひとしく生と世界の謎に對決するかぎり、文藝と宗教と哲學とは、その外的形態の相違にもかかわらず、その形成過程の共通性によつて、內面的に結びつくのである。ここではこれらの諸形態の間の相違にふれることはできない。むしろそれらの形成過程における共通な手法が問題である。それは、ひとがそれに身を托すべき眞理、あるいは生の重みにたえうる眞理は、一方どこまでも客觀的でなければならないとともに、他方それ自身生として生きられるような構造的聯關をもたねばならないこと、したがつてその發見は、ディルタイが詩人の構想力の分析によつて明かにしたような、現實を超出することによつてリアリティーを再現するという仕方によらねばならない、ということである。この意味で世界觀は「現實在の解釋」[7] Interpretation der Wirklichkeit であり、「世界の開示（解釋）」[8] Auslegung der Welt である。

ここからして、ディルタイの生の哲學のもつ特色と同時にその制限も理解されうる、と私は考える。ディルタイにおいて、眞理がどこまでも類型的なものとして捉えられている理由もそこにある、と思うのである。類型とは、ディルタイにおいては、「現實の中からとり出された本質的なもの」であり、「したがつて類型はまず第一に、經驗されたものの高揚をふくんでいる。ただこの高揚は、空虛な理想性に向うものでなく、貧しく猥雜な經驗の意味をも理解させるような力づよく明確な構造をもつ形像のうちに、多樣を再現することをめざすものである」[9] といわれている。それは普遍者であり、規範的意味をもつ理想的なもの das Idealische ではあるが、どこまでも形像的表現を離れえない

ものである。なぜなら、「構想力は形像のうちにのみ生きる」[10]からである。したがつてリアリティーそのもの、眞理そのものは、どうしても有限的、相對的な形においてしか現われえないこととなるのである。周知のようにディルタイは、哲學、宗教、文藝に通ずる世界觀の三つの類型をとりあげ、それらがいずれも生と實在の眞理につながりながら、それを一面的にしか表現しえず、眞理そのものは認識されえないとしている。思うにその理由は、構想力のはたらきが、主として藝術制作の機能とされることからも察せられるように、事物の內面的意味を感得する感情において最も自由にありうるものとして、いまだ完全には意識的・內在的性格を脱しがたいところにあるのではないであろうか。深いパトスに根ざす構想力のはたらきについて、客觀的ロゴスが語られるためには、構想過程は同時に表現的世界そのものの自己限定の意味をもつものとならねばならないであろう。そこにはじめて生は、どこまでもそれ自身のうちから生きながら、絕對の外から自己をみる立場をその中にひらき、その自己省察が客觀的認識となるのではないであろうか。そのときはじめて構想像は、その內在的性格をつきぬけた眞のリアリティーをもつものとなるであろう。しかしディルタイにおいては、生の客觀態としての表現のもつ世界性格が充分に明かでないことによつて、構想像のもつリアリティーが充分の根據を見いだしえないで終つている、と思われる。このリアリティーは、自己を超出し、その限定をこばむものにおいてよくみずからを表現するところの、表現的世界の構造に由來するであろう。構想力のはたらきは、歷史的・表現的世界の論理的構造にもとづいて、そのリアリティーを確保する、といわねばならない。

ところでディルタイは、歷史的實在を對象とする精神諸科學をうみだす心的生の能力を、「歷史的理性」とよび、そのあり方の研究を「歷史的理性批判」Kritik der historischen Vernunft とよんでいる。要するにそれは「歷史的意識の本性と条件の研究」であつた。そして、主體的生があらゆる歷史的事象をそれ自身の聯關にしたがつて追形成 Nachbilden しながらその中に自己を再發見 Wiederfinden des Ich するところに、いいかえれば、あらゆるものの根柢に身をおきながら何ものにもとらわれない自在な立場である歷史的意識の地平をその中にひらくところに、歷史

的認識の客觀性の成立する根據を見ている。[11] そうであるとすれば、歴史的世界においては、理性も構想力と無緣ではないであろう。それは構想過程のただ中に直觀されるものでなければならない。たましいのロゲスは、たましいをその核心からうごかし、またその中心に向つて統べるものとして、古人も語つているように、測りがたい深さを宿すのである。こうして構想力の問題は歴史的理性の問題にまでつながる、といわねばならない。（了）

（1） Die Typen der Weltanschauungen und ihre Ausbildung in den metaphysischen Systemen. G. S. VIII, S. 82. のちにハイデッガーによつて、この「生の氣分」の概念が、人間存在の Grundbefindlichkeit として、世界が根源的に開示される仕方とされるにいたつたことは周知の通りである。

（2） Das geschichtliche Bewusstsein und die Weltanschauungen. G. S. VIII, S. 33.

（3） Die Typen der Weltanschauungen. G. S. VIII, S. 82

（4） ibid. S. 80-81.

（5） Plan der Fortsetzung zum Aufbau. G. S. VII, S. 233, 237.

（6） Die Typen der Weltanschauungen. G. S. VIII, S. 81.

（7） Das Wesen der Philosophie. G. S. V, S. 379.

（8） Die Typen der Weltanschauungen. G. S. VIII, S. 82

（9） Die Einbildungskraft des Dichters. G. S. VI, S. 186.

（10） ibid. S. 218.

（11） 拙稿「ディルタイの歴史的世界」京都大學教養部「人文」第四集參照

（筆者　京都大學教養部〔哲學〕教授）

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article.

Das Problem der Einbildungskraft

von Shinobu Ishida

Im vorliegenden Aufsatz wird versucht, im Anschluss an W. Diltheys „Poetik" die Funktion der Einbildungskraft im lebensphilosophischen Denken zu untersuchen.

Die Einbildungskraft ist nach Dilthey ein Vermögen, das in einer doppelten Art, die im Erlebnis angelegt ist, fungiert: ein Äusseres wird durch das Innere beseelt oder ein Inneres wird durch das Äussere sichtbar gemacht, und Bilder werden geschaffen, welche die Wirklichkeit überschreiten und diese doch repräsentieren. Wie kommt solchen Phantasiebildern Realität zu? Hat sich Dilthey in der „Einbildungskraft des Dichters" vorwiegend mit inneren Seelenprozessen, in denen die Bilder geformt werden, beschäftigt, so werden diese Forschungen seinem späteren System des „Aufbaus der geschichtlichen Welt" eingeordnet, wo das Schaffen des Dichters als Gestaltung des objektiven Geistes verstanden wird. Einbildung erweist sich als eine Erschliessung der geschichtlichen Wirklichkeit und den Phantasiebildern wird ihre Reslität gesichert.

Solche Bildungsvorgänge, welche im psychophysischen Wesen des Menschen angelegt sind, bilden die Wurzel nicht allein der Dichtung, sondern auch der Sprache, des Mythos, der Metaphysik. So hat der Verfasser versucht, durch eine Untersuchung der Einbildungsvorgänge, die einen wichtigen Teil der „Kritik der historischen Vernunft" auszumachen scheint, einen Einblick in die Struktur der geschichtlichen Ausdruckswelt zu eröffnen.